

## 鞍下牛における性比とその終滅

歳 森 茂

鞍下牛とは、島根、鳥取地方に古くから行われていた役牛の出かせぎ形態のものをいい、鞍をつけて労役することによって牛の価値が減耗することを「鞍下が立つ」という方言より由来したといわれる<sup>1)</sup>。四国地方の借耕牛に似たこの形態における特徴の一つは「主として牝牛が利用せられる<sup>1)</sup>」習慣である。これは、この地方が耕土が深い<sup>2)</sup>ため耕運に力を要するためと説明されている。原伝氏（昭和9年）は、「島根県においては、能義郡では牝牡相半し、他郡は殆んど牝牛のみである」と説明している。これは借耕牛においてメス牛が主体である<sup>3)4)</sup>のとは全く異っている。

そこで、借耕牛との関連において、鞍下牛の現状及びその性比を調べるべく、昭和56年12月13日、14日、島根県立図書館、島根大学図書館で調査し、又、島根大農学部農経教室へ問い合わせを行なったが、近年における研究は皆無の様であった。ただ、農経教室より大田市に住む畜産専門家平井秀雄氏の名を聞き、島根県畜産課を通じて電話でお伺いした結果、次のような平井氏の話を得た。

「山間部の田は深かった<sup>5)</sup>。そして、深い田でないとよく米は採れない。深い田は耕すのに力を要するが、メスよりオスのほうが向いていた。大正から昭和の初めにかけて牛耕にオスを多く使った。農家の飼牛はオスが6割ぐらいだったと思う。それは3才から5才ぐらいで体重300キロ以上、中には500キロのものもいた。そして花田植の行事には、きれいに飾った体格の良い雄牛がまるでスターのようで、立派な牛を持つことは農家の誇りだった。そして、戦時中、牛肉資源が不足し、軍の要望で島根の牛がかなり供出され、広島<sup>6)</sup>の宇品（当時の軍港）へ向った。従って極端に牛不足となり、牛の貸借の風習（鞍下牛）は自然消滅になったと思われる。昭和18年頃である。」

又、島根大学教育学部（農場技官）の本田さんに聞くと、彼の亡父が鞍下牛

を借りていたそうであるが、昭和18年頃消滅した感じであるといっていた。そして図1にみられるように、鳥根県の肉用牛は昭和18年を境に急減し、平井氏の言を裏付けている。これに関する資料はみつからないが、鞍下牛の終滅は昭和18年頃とみてよいと思われる。これは借耕牛が戦後も行われたのと大きな差であり、鞍下牛は借耕牛より約20年ぐらゐ早く消滅したといえるようである。<sup>6)</sup>借耕牛や鞍下牛の調査において感ずることは、該当県の農業関係者の中にその名さえ知らない人がかなりみられ、又、とくに早く消滅した鞍下牛の場合は、その経験者は80才以上の古農の中にごくわずか残っているだけだろうと推定されている。民間で行われたこれらの慣習はできるだけ早く記録しておかないと農業史上とりかえしのつかない結果になると思う。

図1に分り易く添記した。昭和18年以降は牛不足のため人耕が多く行われた模様である。

昭和25年鳥根県は約半数の無畜農家をかかえ、農協金融によって5カ年間で1.5万頭の畜牛の増殖に乗り出している。一方、「牛小作」が行われ富農が牛を貸しつけて仔牛をふやす形態のものが行われた。従って四国地方では借耕牛時代より漸進的に機械耕作時代に移行する単純型であるのに対し、鳥根では図のように複雑な推移をたどっている。

さて、鞍下牛における性比について、昭和4年、岡本善久氏は表1のように報告している。<sup>7)</sup>(これは岡本氏の原表に、オスの割合を計算し記入した)。

即ちオスが6～7割を占めている。そして、岡本氏は「性別によってこれを見ると、概して山間部における貸借は牝牛の数が多く、平原部においては牝牛が多い。能義郡においてとくにその傾向が著しいのは、前者においては耕地の関係上、力量の大なる牝を必要とし、後者の如く砂質土においては牝牛といえども充分利用し得るためである」と述べている。

鞍下牛の場合は県内移動が主体であり、広島県比婆郡、鳥取県日野郡、西伯郡からも出向している。そして、メス牛を多く飼育していても耕作に使用せず耕土が深いためオスを借り入れる地方(飯石郡奥部、仁多郡山間部)や、メス牛を多く所有していても牛耕の慣行少なく(牛馬耕田反別は全面積の約24%)自家用に使役しないために貸し出す地方(八束郡)など郡の地勢、土質によっ

て様々な様相がみられる。<sup>8)</sup>

一方、飼育頭数における性比をみると、花崗岩土質で土が軽く牛耕はメス牛を主体とする香川県がオスが極めて少なく10%以下であるのに対し、島根県ではオスの割合は大正から昭和初期にかけていつも3割代を保っていてオスの飼育頭数が多い。<sup>9)</sup>

しかし、牛耕におけるオスの割合が高いことについて批判もある。景山氏(昭和6年)<sup>10)</sup>は、近年改良された牛のメスは体格も増大し、力も増しているので、柔順で使役し易く仕事は丁寧なメス牛を山間部でも飼養し、平素よく調教訓練すればオスに劣らず、仔牛生産も図れて農家経済上有利であると説いている。

又、同じ趣旨で自家のメス牛を農耕に利用することによって鞍下牛を排せの意見も他にみられた。麦作が少なく、牛耕は主として春夏季だけであった島根県山間部では、農繁期の終わった6月中下旬より11月までの間に、市場で若牛と更新し、交換差金として当時5~10円を取得していたようで、メスは妊娠・分娩があり、飼育に面倒だと思いう向きがあったようである。

なお、末尾であるが、本調査に当り貴重な文献を提供して下さいました大田市の平井秀雄氏、ご多忙中種々便宜を計って下さった島根大学塚本正秋氏に深く感謝する次第である。

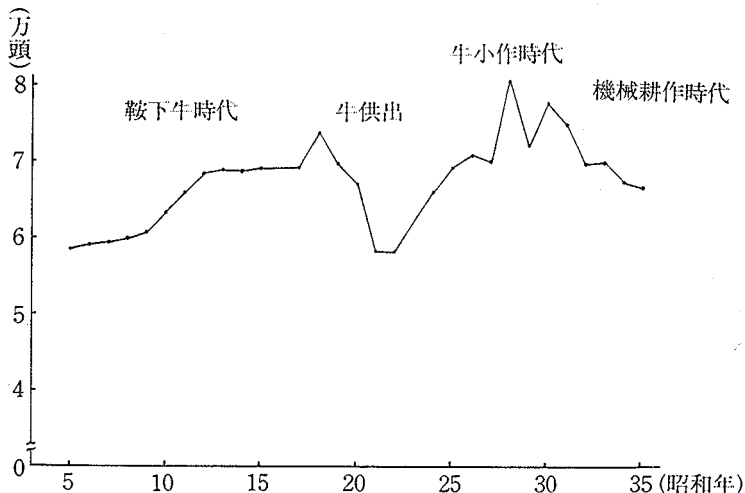


図1 島根県における肉用牛飼育頭数の推移

表1 島根県における郡別移動総頭数

郡名	性比	貸し出し						借り入れ					
		大正6年		昭和2年		昭和3年		大正6年		昭和2年		昭和3年	
		オス	メス	オス	メス	オス	メス	オス	メス	オス	メス	オス	メス
八 東		216	357	95	225	79	211	—	—	—	—	—	—
能 義		221	9	180	23	170	20	574	540	549	547	544	520
仁 多		250	—	242	—	262	—	201	—	180	—	209	—
大 原		184	69	173	54	173	56	8	17	3	10	2	2
飯 石		267	5	243	—	243	—	37	—	49	—	52	—
簸 川		55	6	43	5	42	4	89	3	102	8	99	10
計		1,193	446	976	307	969	291	909	560	883	565	906	532
合計		1,639		1,283		1,260		1,469		1,448		1,438	
全体に占めるオスの割合		72.8%		76.1%		76.9%		61.9%		61.0%		63.0%	

(注：岡本善久氏の原表に基づいて作表した)

【注および参考文献】

- 1) 内田秀雄 (1932)：役牛移転を中心として 観たる阿波における 農業地理の一特質について、地理論叢，京都帝国大学文学部地理学教室，p. 80～81.
- 2) 原伝 (1934)：出雲地方の鞍下牛，松江藩経済史の研究，日本評論社，p. 252.
- 3) 安藤文桜・香川清美 (1962)：借耕牛の研究，四国農業試験場報告，第6巻 p. 401によれば，1951年，岡田茂男氏の借耕牛の調査において，夏の貸出頭数約3,200頭における性比は牝牛が95%を示していたという。
- 4) 1981年8月，筆者等が香川県塩江町の農家及び元農家を対象に借耕牛に関する調査を行なった。同町より出かせぎに出向した牛の性比は，回答のあった42軒中，「全部メスだった」が36軒，「ほとんどメスだが時にオスだった」が1軒，「オスのことが多かった」が1軒，「全部オスだった」が1軒，不明3軒であった。
- 5) 砂質で水の不足し易い香川では山間部の田は極めて少く，主として平地に集中し，そして土が軽いので牛耕し易く，水田の牛馬耕率は100.0%で全国一であり，島根県では70.0%であり，30.0%が人力耕に依存した。(農林省畜産局，1951，昭和23，24年度畜産提要による)
- 6) 塩江町上西の藤本孝市氏(借耕牛の仲介人3代目)によれば，その消滅は昭和44年頃で，耕運機をまだ持っていない農家の注文中で，わずかに1～2頭を扱ったのが最後だという。

- 7) 岡本善久 (1949) : 出雲の鞍下牛の慣行, 鳥根県農会報, 374号, p. 24~28.
- 8) 前記の原伝著書, p. 257.
- 9) 鳥根ではオスの割合が, 大正 8 年 38.0%, 昭和 5 年 36.5%, 昭和 7 年 32.6% と高く, これは全国的に見ても高いほうである。これに対して香川では昭和 5 年において 5.8% で全国最低である。昭和 25~26 年, 鳥根 20.7%, 香川 9.0% でやはり大差がある。これは香川ではオスは主としてタネ牛用に残すだけで, 耕牛はほとんどメスだからである。
- 10) 景山生 (1951) : 牝牛飼養のすすめ, 鳥根之畜産, 9 月号